

『教育学年報一四号 公教育を問い直す』・原稿募集

次号の特集テーマは、「公教育を問い直す」です。現在、「公教育」の概念が問われています。繰り返される教育改革に対して、改革至上主義との批判もあります。他方、社会変動の下で、学校という制度や教育という觀念の意味を問い直さざるをえない局面にあるのも事実です。この構造的な問題は、コロナ禍における長期の臨時休校を経て先鋭化し、学校の未来像や公教育の在り方について、複数の競合する道筋も浮かび上がってきています。

学校と社会の境界線がゆらぎ、従来の日本社会における、学校教育と家庭生活、地域活動、労働等との構造的連関を再構築することが課題となっています。その中で、一般社会の当たり前と隔絶した学校を社会に開き、社会、特に経済界が求めるコンピテンシーを意識した人材育成機能を強化すべきではないか、新自由主義の進行の中で既存の社会を批判的に問い直すような主権者教育、市民性教育が重要ではないか、あるいは、学校という場は必ずしも教育機関である必要はなく、福祉的な役割をより重視すべきではないかといった具合に、学校の機能と役割が問われています。また、日本学術会議会員の任命拒否問題をはじめ、学問の自由と民主主義、公教育における国家統制と教育の自由といった問題も、切実性を帯びています。

さらに、これまで学校が担ってきた、あるいは新たに担うべきとされる機能と役割を誰が担うのかというとき、必ずしも教師が担う必要はないのではないかという論調も大きくなっています。これまでも、社会に開かれた学校、コミュニティ・スクール、チーム学校など、学校と家庭と地域、あるいはさまざまな関係機関や専門職との連携・協働が重視されてきました。コロナ禍を経て「脱学校」論の動きは大きくなり、GIGAスクール構想をはじめとするICT環境の整備も追い風に、教育ベンチャーや教育NPOの存在感が増し、その活力への期待感も高まっています。働き方改革

も手伝って、学校のスリム化や仕事の外注が進むことが予想されますが、それは教育の市場化・商品化、特に、教師という専門職、さらには学校という公的機関を経由しない、自由で多様な教育の在り方をも予感させるものです。

こうした、学校の公共的使命、人材育成等に止まらない教育という営為の価値、教職の専門性などが問われる中で、第一四号では、「公教育を問い直す」を特集テーマとしました。たとえば、学校の機能と役割や公教育の理念や公共性概念に関わる哲学的・歴史学的検討、「新しい能力」言説、カリキュラムの公共性、個性・多様性重視といった教育内容・方法面での検討、教職の専門性と自律性、働き方改革といった教師研究の立場からの検討、学校のボーダーレス化、多様な教育機会の保障、多様なアクターを想定した教育ガバナンスの在り方といった教育経営学的・教育行政学的検討といったテーマ群が考えられます。そして、それらを日本の現状分析に止まらず、国際的な動向の分析という形で展開していくことも考えられます。こうしたテーマ群はあくまで例示であり、「公教育」という大きな主題に関わって、新たな問いや研究課題が大胆に提案されることを期待しています。皆さまからの自由で積極的な投稿をお待ちしております。査読の結果、特集論文ではなく自由投稿論文のカテゴリでの掲載とする場合もあります。

●『教育学年報』投稿要領

1 発行予定 二〇二三年八月

オープン・レビューによる査読の上、編集委員会で採択の可否を決定します。

2 募集原稿の文字数

【タイプ① 次号テーマ「公教育を問い直す」に沿う原著論文】

- 一六〇〇〇字以内。原稿はA四判(横置き)で縦書き、一頁あたり三〇字×四〇行で作成し、図表・注を含めて、一四枚以内を一六〇〇〇字とみなします。なお、査読の結果、タイプ②の原著論文、あるいは研究ノートとして掲載することがあります。

【タイプ②】自由テーマの原著論文】

一六〇〇〇字以内。原稿はA四判（横置き）で縦書き、一頁あたり三〇字×四〇行で作成し、図表・注を含めて、一四枚以内を一六〇〇〇字とみなします。なお、査読の結果、研究ノートとして掲載することがあります。

【タイプ③】研究動向紹介・書評・エッセイなど】

一〇〇〇〇字以内（超える場合は応相談）。原稿はA四判（横置き）で縦書き、一頁あたり三〇字×四〇行で作成し、図表・注を含めて、九枚以内を一〇〇〇〇字とみなします。

3 原稿の形式と送付先

① 「MS Word」と「PDF」の二種類（同内容）の電子データで提出してください。

② 原稿とは別に、日本語による概要（四〇〇字程度）を付してください。掲載が決定した場合、別途、英文タイトルの提出をお願いします。

③ 原稿は、論文題目、原稿の種類、投稿者の氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスをお書き添えの上、世織書房メールアドレス〈seori@nifty.com〉へお送りください。メールでのご提出が難しい場合は、世織書房（〒四五一三一七―三二七六）までお電話ください。

4 投稿内容は未刊のものに限りませんが、既発表の論文が部分的に組み込まれていてもかまいません。その場合は重複部分を明示し、投稿論文とあわせて参考論文をお送りください。

5 投稿論文は各号の採択が判明するまで、他の媒体へ重ねて投稿しないでください。

6 締め切り 二〇二三年二月二十八日（必着）

7 問い合わせ先 世織書房メールアドレス〈seori@nifty.com〉

『教育学年報一五号 二一世紀の生涯学習』・予告

二一世紀は学習社会とされ、グローバル経済による競争を前提とした「社会人の学び直し（リカレント教育）」が、人生一〇〇年代などの長寿化によって生涯学習が、それぞれ関心を呼ぶ状況にあります。日本では社会教育として学齢期以降の学習を扱ってきたものの、本来「ゆりかごから墓場まで学び続ける」生涯学習は今や技能の獲得・更新による資格化を指すようになっていきます。学校教育あるいはリカレント教育との関係を含めて生涯学習を改めて扱いたいと思います。その詳細な趣旨は第一四号に掲載します。ぜひ確認してください。